

新・瘡我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第三十五回 拓殖大学の伝統

第二次大戦での敗北は、日本という国家が過去に経験したことの無い亡国的な悲劇であった。昭和二十年三月には、東京大空襲により帝都東京が壊滅、八月には広島、次いで長崎に原子爆弾投下、ポツダム宣言受諾を経て八月十五日には昭和天皇の悲痛なる終戦の玉音放送に接し、国民は茫然自失であった。

終戦時に六歳であった私にも、あの日の記憶は切なくも鮮やかに残る。山梨県の甲府、当時人口八万人ほどの山国の小さな街が、米軍の激しい空襲を受け、生き延びて母の里にたどり着いた。気

がつけば、上半身に火傷をいくつも負っていた。火傷の痕は、寒い日にはいまでも疼いてあの日の恐怖を呼び起こす。

八月十五日、母の里の広い庭に敷かれた蓆に人々は座し、玉音放送を聞く全員が両手をついて唸るように泣いていた。「亡国」、日本人の胸裏を去来したのは、この言葉だったにちがいない。

しかし、圧倒的な権力者として君臨したGHQの統治下にありながらも、日本人は戦後復興を志し、経済力の回復と国際社会への復帰を求め、国の総力を挙げて全力疾走を開始した。昭和二十六

年にはサンフランシスコ講和条約によって主権を回復、日米安全保障条約の締結によって自由主義陣営に属し次第にそのプレゼンスを拡大していった。

驚嘆すべきは、昭和三十年代に入るころから加速した高度経済成長であった。強化拡大した経済力を背景に日本はGATT、IMF体制の主導国の一つへと変貌した。日本は、戦後の苦窮にありながらも、アジア諸国に対する戦時賠償を支払い続けた。これが、のちの一九九〇年代に日本を世界最大のODA（政府開発援助）大国たらしめる契機となった。

歴史はひたすらなる錯綜である。第二次大戦が「侵略」であったか、はたまた「解放」であったか、永遠の論争課題であろう。しかし、この大戦が日本を亡国の淵に立たしめ、アジアの各国に惨禍を及ぼしたことは事実の問題としてこれを深く心に留めねばならない。

少なくとも拓殖大学の指導者たちは、この事実を重く認識するとともに、敗戦のために志を半ば

にした卒業生たちの無念に思いを馳せ、戦前期における「海外雄飛」の伝統を受け継ぎ、アジアの「地の塩」たらんとする理念を掲げて諸事業に打ってでた。

その一つが、拓殖大学再生プランとして国際協力大学構想が掲げられたこと、二つが、インドネシア賠償留学生の受け入れ、三つが、南米移住事業であった。

しかし、このことを述べる前に、どうしても語っておかなくてはならないことがある。敗戦後、拓殖大学に対する社会の目が、随分と冷たかったという事実である。

あの終戦以降、「自虐史観」とも呼ばれる、戦前期日本に対する幼見的なほどにネガティブなイメージを多くの日本人はGHQによって埋めこまれてしまっていた。建学以来、台湾、朝鮮、満州、中国で活躍する人材を養成してきた教育機関が、拓殖大学である。それゆえ、なにか軍部の侵略政策の片棒を担いだかのような、ひどい誤解が生まれた

らしい。

拓殖大学の伝統は、これらの地域の開発と近代化のために「草の根」で懸命に働く人々の養成であった。それら人材の現地社会に対する貢献は人々の高い評価をつねに受けてきた。拓殖大学の理念は、桂太郎、後藤新平、新渡戸稲造の思想のなかに顕現している。後藤の用語法をもってすれば、現地の「旧慣」を重んじ、それに適合した形で種に芽をふかせるという「生物学的」な開発途上国経営論であった。

しかし、戦後の思潮にあつては「拓殖」というコンセプト自身が、植民地化、英語でいえば、コロナイゼーションという否定的な意味合いをもって、受け取られるようになってしまった。この思潮の影響、世の評価の冷たさは、大学にも響いた。拓殖大学内部からも「拓殖」を忌避する意見が出て、校名が「紅陵大学」に変更されたこともあった。校名をそのように変更すべしといった公式の、たとえばGHQなり文部省なりの関係当局からの指示があ

ったわけではまったくない。この事實は、当時の自虐の時代思潮がそれに逆らうことができないほどに強いものであったことを物語っている。

拓殖大学がかるうじて戦前の矜持を保って再出できたのには、占領下という厳しい状況にありながら伝統を見失うことなく、毅然として新しい方向性を示した高垣寅次郎と矢部貞治の存在が大きい、といわねばならない。

昭和三十年三月に第十代拓殖大学総長に就任した矢部貞治は、東京大学で政治学教授を長く経験した政治学の権威であった。矢部は、敗戦後の拓殖大学の存在意義はいよいよ高いことを説き、拓殖大学生は、独立したとはいえないなお貧困と停滞をつづけるアジア諸国の開発の「地の塩」となれ、と繰り返し強調したのであった。その格調高く、当時の学生の胸をゆすぶった矢部の文章をここに掲載しておきたい。

拓殖大学には矢部が総長の時代に大学内に設置された地域研究組織、海外事情研究所があり、そ

の機関誌が現在も月刊で発行されている『海外事情』である。その創刊の辞に矢部はこう記した。

「積極気概の精神をもって海外に活躍し、とりわけアジアの独立と繁栄のために喜んで殉ずる青年を育成することは、わが拓殖大学建学の大きな指標であった。この指標は過去において幾多の成果をうんだが、この建学の真の精神は、今こそ大いに振起されねばならない。

それは単に、四つの島に九千万に近い人間がひしめいている日本の現状を思っただけでも、思い半ばに過ぎるものがあるが、しかし其の精神はその様な功利的側面にあるのではない。むしろ大東亜戦争の世界史的成果としてもたらされた、アジア諸民族の解放と独立を確固たる土台の上に充実し確立するため、諸民族が相携えて、アジア固有の文化を高揚しつつ、近代の科学技術を導入し、豊かな未開発資源を開発し、農業を改革し、工業化を推進し、有無相通の通商貿易を振興して生活水準を高め、衛生福祉を向上せしめる事業に、われら日本人が地の塩となつて、寄与し奉仕すべき余地が、今ほど

拡大している時はないという意味である。

深い懺悔の念と祈りのところをもって、そのような寄与と奉仕につくすことが、アジアに対して日本が犯した過去を償う唯一の道であり、アジアの自主と繁栄の中のみ、日本の自主と繁栄も存立できることを想えば、日本本位の利己主義ではなく、母なるアジアそのものの自主と繁栄のために奉仕することが、やがて日本の命運を切り開く途であることを自覚しなければならぬ。

その意味で、アジアの指標は日本の指標であり、それに寄与し奉仕することが、正に拓殖大学の精神に合致するものである。膨張主義がことごとく崩れ去った今こそ、われら日本人は、天地神明に恥じない公明心をもって、アジアの諸民族と交わることが出来る。わが建学の精神が、そのような意味で今こそ発揮されねばならない」

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、『成長のアジア 停滞のアジア』で吉野作造賞受賞。八七年、『開発経済学』で大平正芳記念賞受賞。九〇年、『西太平洋の時代』でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、『神経症の時代』で開高健賞正賞受賞。二〇一一年、正論大賞。